
シンポジウム 日本におけるラテンアメリカ研究

はじめに 山崎 春成

日本におけるラテンアメリカ研究の歴史は、まだ新しい。研究の進展を保障する制度的基礎もまだ整っていない。ラテンアメリカ関係の講座をもつ大学も専門の研究機関もまだ数えるほどしかない。研究者の層はまだうすく、それら相互の交流、学術情報の流通も十分とはいいがたい。

それでもラテンアメリカ研究にかかわりをもつ研究者の数は次第にふえて、種々の専門分野のラテンアメリカ研究者を網羅した日本ラテンアメリカ学会が発足するに至った。そのことは、日本のラテンアメリカ研究がようやくモメンタムをもつに至ったことを示すものであるにしても、その本格的展開はまったくこれからのことにぞくする。

日本ラテンアメリカ学会創立の機会に、われわれは日本におけるラテンアメリカ研究についてのシンポジウムをひらく。いうまでもなくその目的は日本におけるラテンアメリカ研究の現状を主要な学問分野ごとに概観し、今後の課題を明らかにすることにある。報告は、文化人類学、歴史学、文学、経済学、医学という五つの分野についておこなわれる。このほかにも社会学、政治学、地理学など逸すべからざる領域があるが、時間の制約などで割愛せざるをえなかった。

各領域からの報告は、日本におけるラテンアメリカ研究が全体としてどういう地点まですすみ、どういう偏りがあり、どういうアナがあるかななどについての大きな見取図をえがく助けとなるであろう。研究者がどういう領域や研究テーマに専門化していようと、そういう見取図をもち、そのなかでの自分の

位置をたしかめておくことが必要であろう。

地域研究は、何でも屋のゼネラリストだけでは進歩しない。研究の専門的分化が必要である。しかし専門的分化が進めば進むほど、広い視野に立った総合化の必要も強まる。地域研究にとっては、学際的な研究協力がとくに必要なことはいうまでもないが、そのためにもラテンアメリカ研究全般の到達地点の見取図が必要であろう。ラテンアメリカ研究という大きな場を共通してもつが、種々の専門領域にわかれ、さらに、ことなつた時代やことなつた国を研究対象とする研究者が、たがいに情報を交流し、刺激しあい、協力してゆく場をつくりだすこと——そのための一つのステップとしてこのシンポジウムが役立つことを期待したい。

文化人類学 大貫良夫

ラテンアメリカの文化人類学的研究が本格的に日本で進められるようになるのは、戦後のことである。そもそも文化人類学という名称自体、日本では戦後に普及したのであり、大学における専門課程ができたのも同様である。文化人類学は、ヨーロッパにおいて民族学あるいは人類学、アメリカにおいては人類学として発展してきた学問分野で、専門の学としての成立は19世紀も末近い頃である。その目的や観点は、方法論とともに紆余曲折を経てきたが、基本的には、人間の文化をさまざまな要素の機能的連関の体系とみなし、またその体系は不動の構造をもつものではなく、時間とともに変化するものとみて、そのような文化の全体的構造と変化のプロセスを解明することを目的としているといえるだろう。しかし、そうはいっても、文化人類学が対象とした文化は、全体の展望なり把握なりの可能なもしくはそのような全体把握のための学問的操作の容易なものがほとんどである。それは、非文明社会や非都市社会、あるいは都市とか国家社会の中の小さな部分社会である。そしてもうひとつ、特にアメリカでの伝統であるが、先史学の分野である。アメリカ大陸では文字による歴史記録は皆無に近く、原住民の文化伝統を問題にすると、16世紀よりも